The Japan Society of Educational Sociology

文学青年と雄弁青年

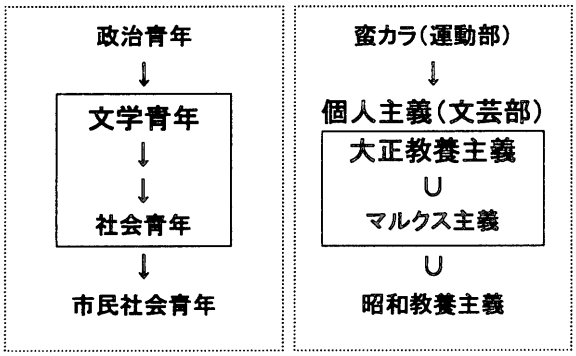
——「明治40年代」からの知識青年論再考——

井上義和（京都大学）

1. 知識青年論の前提

文学青年の話から始めよう。

内田義彦・塩田庄兵衛「知識青年の諸類型」（1959）という知識人論の古典がある。如何なる時代背景の下に青年期を過したのかという観点から特徴的な世代を四つに割り切って類型化し、近代日本の知識人論に明快な見取図を与えた。それによれば、明治末期から昭和初期までの間に、二つの世代類型が登場したことになっている。ひとつは文学青年、もうひとつは社会青年である。前者は「日清戦争前後に物心がつき…日露戦争前後の軍国主義の雰囲気の中で自我の覚醒を与えられた」世代で、別名明治・大正青年。後者は「大正中期以降の社会的動乱に思想的影響をうけた」世代で、別名大正・昭和青年。そこで読者の記憶の中ではこう要約される。大正期には文学青年から社会青年へという世代類型の転換が起こったのだ、と。問題にしたいのは、この「文学青年→社会青年」という図式である。



（知識青年論の前提図式≒文学青年中心史観？）

内田・塩田から40年後の知識青年論のテーマ・セッターとして筒井清忠と竹内洋を取り上げておくのは、一応常識の範囲内であろう。筒井の『日本型「教養」の運命』（1995）と竹内の『学歴貴族の栄光と挫折』（1999）では、ともに射程を広く深く設定しながら知識青年の盛衰の「衰」にまで踏み込んだ議論が展開されている。それだけでなく回顧録や読書調査などの質的量的データを巧みに駆使する歴史社会学的手法によって、知識青年論を検証可能な学問領域に引き上げた。近代日本の知識青年がこうして歴史的存在となりつつあるその一方で、しかし「文学青年→社会青年」図式は、巧妙な形で生き残っている。

筒井と竹内は図式をこう言い換える。大正期には教養主義からマルクス主義へという規範文化の転換が起こったのだ、と。さらに、マルクス主義は教養主義と「対抗しつつも相補的な関係」（筒井）にあり「教養主義の上級バージョン」ないし「教養主義左派」（竹内）であった、とも付け加えた。「文学青年→社会青年」図式が世代類型や規範文化の変遷という系統発生の水準にとどまらず、個人の精神形成史上の経路という個体発生の水準にまで適用されている点に注意しよう。図式が単なる順序関係にとどまらず、「文学青年コ社会青年」という包摂関係までも含意するようになっているのだ。とすれば、筒井と竹内において「文学青年→社会青年」図式は強化されていると云ってもよい。

もちろんこれも歴史社会学的考察の知見ではあるが、だからといって特別に穿った見方という訳でもない。たとえば次の回顧録（1979年刊行）は大正末期の教養主義の典型例であるが、既に「文学青年→社会青年」図式の応用＝転用を見て取ることができる。

大河内一男（大正12年三高入学）

「[大正末期]当時の中学から旧制の高校へかけての…おおかたの青年は、いわゆる『文学青年』か『哲学青年』でした。別に自分の職業上の人生を文学者とか哲学者ときめていたわけではなかったのですが、そうしたものの洗礼を受けることが若い時分の人生にとってはあたり前のことだと誰もが内心思い込んでいたようですし、私なども、その例外ではありませんでした。」

「[三高時代に『共産党宣言』と出会ってから]私はマルクスの著作やマルクス主義に関するあれやこれやの解説書や翻訳書を手あたり次第に読むようになっていましたが、やはり濫読癖はぬけませんでした。『文学青年』が『マルクス青年』になったとでも申しましょうか。もちろん生かじりの青二才でありました。」（『暗い谷間の自伝』1979:6，60）

内田・塩田の論文はここまでは云っていない。しかし振り返ってみれば、その論考の中で政治青年30頁・文学青年4頁・社会青年10頁・市民社会青年0頁（！）という異様に不格好な体裁ながら原型を与えられた「文学青年→社会青年」図式が、20年の間に回顧録等で手軽に転用されるフォーク・セオリーとして反復＝定着し、さらに20年後の現在、再びアカデミックな装いの下に生き長らえているのだ。初出が内田・塩田論文であるか否かはともかく、その図式の強靭な生命力に、まずは素直に驚いておこう。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

2. 問題設定——存在の発掘と埋没の理由

本発表では、この「文学青年→社会青年」図式からは全く忘れ去られた世代類型を取り上げる。日露戦争後に隆盛をきわめる第二次弁論ブームの中で自ら進んで演説の修錬と実践に励んだ者、これを雄弁青年と名付けておく。大正初期を含む明治40年代（1907～16年頃）、つまり内田・塩田の文学青年とほぼ同時期に析出された世代類型である。何が彼らを演説に駆り立てたのかはともかく、まとまった層（団塊）として登場してくる時代がかつてあったのである。具体的には、著名人の回顧録と幾つかの客観的な指標を組み合わせながら、次のことを明らかにする：

①明治40年代の知識青年予備軍にとって文芸部と並んで弁論部が現実的な選択肢でありえた程度には、弁論ブームが盛り上がっていた。そして、

②「文学青年と雄弁青年」という図式が当時を回顧するときの準拠枠でありえた程度には、雄弁青年は世代類型として成立可能であった。

しかし、にもかかわらず、雄弁青年が忘れ去られてしまったとすれば、それは何故にか。存在の発掘と同時に埋没の理由についても解明しなければならない。これは最後に仮説を提示する。

3. 文学青年と雄弁青年——明治40年代の分岐点

文学青年（文芸部）	雄弁青年（弁論部）
自然主義／懐疑主義 写実的自然派の耽美感 ﾌｨﾛｿﾌｨｰﾚﾝ・沈潜型思想家 自我探求派／耽溺文士	理想主義／確信主義 基督教的新青年の正義感 演説使い専門のｿﾌｨｽﾄ 政治家志望／新人会
↓↓↓	↓　↓↓
大正教養主義（文学／哲学）	**初期社会青年（政治／運動）**

4. 空白の「明治40年代」と、1890年代生れの世代論

大正初期までを含めた「明治40年代」を改めて振り返ってみれば、この時代は運動部的蛮カラが学校文化において直接的な影響力を失ってしまった一方で、教養主義文化は未だ十分な影響力をもつに到っていないという、規範文化におけるある種の過渡期であった。そして、知識青年予備軍にとって「文学青年か雄弁青年か」という選択肢が現実味を帯びる程度には、明治40年代はまさしく雄弁青年の時代であった。こうした時代は、後にも先にも明治40年代だけなのである。

この時期に高等学校や大学予科に進学した1890年代生まれが、したがって雄弁青年世代ということになる。本発表の登場人物で云えば、河合栄治郎（1891年生）河上丈太郎（1889年生）から、林達夫（1896年生）三木清（1897年生）の少し後までの世代を含む。ここで雄弁青年の明治40年代論を1890年代生まれの世代論として整理しておくことは、同義反復にとどまらない意味がある。

たとえば清水幾太郎（1907年生）も久野収（1910年生）も、先の1890年代生まれとは十歳前後しか違わない。しかしここには、雄弁（青年）の記憶をめぐる埋めがたい世代的断絶がある。物心つき始めた頃の記憶だから曖昧だというのでない。二人とも明治40年代を素朴に誤認しているである。ここで想起されるのは、あの強靭な生命力をもった「文学青年→社会青年」図式である。「文学青年と雄弁青年」図式が明治40年代の知識青年たち（1890年代生）が回顧するときの準拠枠であったのと同じように、「文学青年→社会青年」図式もある特定世代が回顧するときの準拠枠であったとすれば、どうだろうか。

戦後の論壇をリードしたのは内田・塩田による四番目の類型すなわち「市民社会青年」の世代であった。だいたい1905～15年生まれ（敗戦時の30歳代）に相当し、大河内一男（1905年生）から丸山眞男（1914年生）辺りまでが含まれる。「知識青年の諸類型」を担当した内田義彦（1913年生）と塩田庄兵衛（1921年生）はもちろん、この論文が収録された『近代日本思想史講座Ⅳ：知識人の生成と役割』の執筆陣、さらにはこの講座の編集責任者たちも、ほとんどが市民社会青年と同じかそれより下の世代になる。この世代を基点にするならば、冒頭で示唆した順序は次のように逆転されなければならない。

※

大正末期から昭和初期にかけて高等学校時代を過ごした市民社会青年世代の規範文化は、確かに筒井と竹内がいう「教養主義の上級バージョン」としてのマルクス主義であった。彼らが当時を回顧するときの準拠枠が、大河内を典型例とする「文学青年コ社会青年」図式であっても何ら不思議はない。そして、むしろこれが本来のフォーク・セオリーではなかったか。とすれば内田・塩田の論文は、自分たちの世代の構成要素（文学青年と社会青年）の分析と起源への遡行を試みたものということになる。つまり個体発生の考察を系統発生の水準にまで適用して、知識青年の歴史を再構成したのではなかったか。ここでは、雄弁青年はそれ自体としては対象に入ってこないのだ。

他方の1890年代生まれは戦時中の現役世代（敗戦時の45～55歳）ということもあり、戦後に知識人論／知識青年論を語る代表をもちえなかった。彼らの回顧の準拠枠は公には語られず、したがってフォーク・セオリーとして共有されるには到らなかったのである。

大正初期を含む明治40年代の経験に基づいて知識青年論を構想するならば、そこに描かれる歴史像はおそらく違ったものになる筈である。

NII-Electronic Library Service